

湯漬

るは、さして痛所も候はず、又くるしき事も候はず、いかに候哉、覽物のたべられ候はで、日數つ  
もり候ぬる間、無力にて氣よはく覺候也と申ければ、おとよく御覽じて、汝は實の病にて  
はなかりけり、さだすけが啄木をやむ也、其儀ならば慥に物くへ、さだすけには、やくそくしたれ  
ども、經信の流の啄木を教へんする也、それは汝うれへおもふべからず、我見ん前にて物くへ、見  
て心安く思はんとせめさせ給て、飯を水づけにして、すゝめさせ給に、かひく敷くいてけり、さ  
ればこそとて御心安なりてかへらせ給けり、

〔三省錄後編二〕世俗、先祖を祭るに、美味珍膳を用う、今按するに非なり、中伊勢の宮、朝夕の御膳  
供物、蒸飯、水四盛、御鹽、螺、熨斗、飯は三杵半のしらげ、酒は一、夜酒、飯を水にひたしたるものなり、諸  
物みな蒸して用ゆ、煮ることなし、略下

〔饅頭屋本節用集食物〕湯漬

〔倭爾雅六〕飧飯、飯並水、飯並同

〔本草綱目啓蒙十七〕飯造

飧飯 ミヅ、ケメシ ユヅケメシ

〔倭訓栞中編二十七〕ゆづけ 飧食をいふ、源氏の水飯も同じといへり、侍中群要に、召御湯漬事と  
見ゆ、

〔類聚名物考飲食一〕湯漬 ゆづけ

今思ふに、俗にも湯漬といふ物語などにも多く見えたり、

〔秋苑日涉八〕諸飯湯飯

以飯漬湯中煮之曰滌飯、清波雜志曰、高宗詔有司、毀棄螺填椅卓等物不可留、仍舉向自相州渡、大河、  
荒野中寒甚、燒柴借半破甕、盪温湯滌飯、茅簷下與汪野彥同食、今不可忘、字典曰、滌音泡、漬也、